令和３年１０月１４日（木）　吉川市立南中学校だより「南風」
吹奏楽部全国大会出場記念増刊号

学校教育目標　よりよく生きる
南中学校　　☎：982-1066
さわやか相談室　☎：981-8749
ホームページ：http://02.yoshikawa-ed.net/minami/

| R3.10.14 現在 | 学級数 | 生徒数 |
|---|---|---|
| １ 学 年 | ５ | １６２ |
| ２ 学 年 | ４ | １５８ |
| ３ 学 年 | ５ | １６５ |
| 特別支援 | ５ | ２４ |
| 合　　計 | １９ | ５０９ |

# 吹奏楽部全国大会随行記

吉川市立南中学校　校長　福嶋　正悟

令和 3 年 10 月 9 日(土)午後 4 時 33 分、吉川市立南中学校の挑戦が始まった。吉川市始まって以来の吹奏楽部の全国大会出場。たった 7 分間の演奏。その 7 分間のためにどれだけの練習をしてきたのか。私も、そして、ほとんどの人は、それを知らない。この 7 分間のために生徒も先生も、師事してくれた指導者も、どれだけの時間を費やし、どれだけ練習を繰り返し、どれだけの悔しさをバネに、どれだけ努力し続けたのか。そして、どんな思いで、この仲間とこの演奏を創り上げたのか。それは、本人達しか知るわけがない。よって、ここから先の吹奏楽部全国大会随行記は、その点だけはご容赦の上、お読みいただきたい。

驚くべきことに、ディベルティメントと呼ばれるこの楽曲は、南中学校の吹奏楽部のためにプロの音楽家が新たに書き直した譜面であった。譜面作りが始まったのは、2021 年 1 月のこと。22 名の生徒に合わせた編成にして、音の効果を考え、ピアノで試奏を繰り返し、イメージして創られた楽曲だという。その出来上がった譜面を吹奏楽部が受け取ったのは 4 月のこと。そこから 6 ヶ月もの歳月をかけ、最後の演奏の地である札幌コンサートホール Kitara のステージに指揮者と 22 名の生徒は立った。パイプオルガンを背にした壮大なステージは全国大会にふさわしく、雄大で荘厳な雰囲気に包まれていた。

しかし、本番の演奏の話の前に北海道に降り立ってからの話をしなければならない。10 月 8 日（金）午前 11 時 35 分、吹奏楽部一行を乗せた飛行機は、予定通り新千歳空港に着陸した。そして、一行はすぐにバスに乗り、練習用に抑えてあった北広島市芸術文化ホールに向かった。昼食は走るバスの中で弁当で済ました。吹奏楽部の練習には時間がかかる。楽器を搬入し、組み立てる。呼吸の練習をして、集中力を高める。さらに、各個人でチューニングをして、音出しを始める。しかし、チューニングはこれでは終わらない。フルートはフルート、クラリネットはクラリネットというように楽器ごとに複数の演奏者がいる。だから楽器ごとに合わせてチューニングをする必要がある。さらには、22 人全体でのチューニングもしなくてはならない。練習ホールに入って、最初の 1 時間半はチューニングだけで終わってしまった。

その後、練習は延々と続く。全国大会前日であれば、軽めの調整なんていうのはスポーツの世界の話。途中、何度か休憩はあったが、練習は午後 8 時まで続いた。もちろん夕食は、またまたお弁当だった。しかし、それにはちゃんとした理由がある。実は北海道まで楽器を運ぶには船便しかなかった。船便には時間がかかる。吹奏楽部が楽器を搬出したのは 10 月 7 日（木）のこと。それ以降、満足な練習ができていなかったのだ。その遅れを取り戻すための猛練習だったのだ。師事している音楽家は、演奏を細かくチェックしていく。気になるところがあれば、容赦なく譜面に付箋（ふせん）をつけていく。無数についていく付箋。その一つ一つを修正していく。何度も何度も、気の遠くなるような練習を繰り返す。素人目には、何が悪いのか分か

らない。しかし、演奏がどんどん良くなっていくのだけは分かる。目を閉じていれば、決して中学生の演奏だとは思えない雄大な音楽がホールに響く。宿についたのは午後 9 時のことだった。

吹奏楽部の全国大会は、正確には東日本学校吹奏楽大会という。その演奏順番は、くじ引きにより決定し、南中学校の演奏は最後から 4 番目と決まっていた。午後 4 時 33 分演奏開始だから、当日の午前中は当然のように練習であった。午前 8 時 45 分には、前日と同じ北広島芸術文化ホールに到着していた。そして、練習は午後 1 時まで続いた。昼食はもちろん弁当。しかし、本番用の特別な練習もしなければならなかった。審査されるのは 7 分間。しかし、ホールに到着して、すぐに演奏するわけではない。20 分のチューニングタイム、続いて 9 分間のリハーサル。そして、ステージに部員総出で楽器を配置する。それを本番と同じように 9 分間でステージ準備を終える練習が必要だった。舞台袖から楽器を運び、演奏準備を整える。誰が何をどこに運ぶのか。入念にチェックし、楽器を運ぶ練習をする。もちろん、私も楽器を運ぶ。（ティンパニーを運ぶ係でした。）

ここまで読んでくれた人ならお分かりのことかと思うが、随行記のほとんどは練習。逆に言えば、これほどまでに練習しなかったら全国大会には出場できなかった。私は、ディベルティメントを世界で一番練習した中学生は吉川市立南中学校吹奏楽部だと、胸を張って言える。

東日本学校吹奏楽大会の会場である札幌コンサートホール Kitara に到着したのは、午後 2 時 40 分のこと。そこには、全国の猛者（もさ）が集っていた。予選を勝ち抜いてきたものだけが発するオーラと本番前の緊張感がビシビシ伝わってくる。もちろん、会場内は写真もビデオも一切撮影禁止。携帯電話は電源を落とすしかない。バックヤードに楽器を搬入し、打楽器などを組み立てる。そして、専門スタッフが最終的な楽器の調律を行う。次から次へと搬入されてくる様々な学校の楽器。ベルトコンベヤーに載せられたかのごとく、打楽器と吹奏楽部は少しずつステージに近づいていく。次は自分たちの演奏の番。舞台のそでの一番近くで待つ瞬間、緊張はピークに達した。私は、ダッシュで会場の席へと向かった。

まばゆいライトの光の中で、タキシードに身を包んだ太田先生が指揮を振る。その瞬間、一糸乱れぬ壮大な演奏が始まり、一瞬にして鳥肌が立った。これまで積み重ねてきた練習をすべて解き放つように演奏は続く。フルートのソロパートは言葉にできないほど美しく、それを支えるマリンバも見事としか言いようがない。憎しみや苦悩を表現するのは容易なことではない。22 人の努力の結晶がディベルティメントを創り上げている。長くて短い 7 分間。指揮者って、こんなにカッコいいんだなと思った 7 分間。こんな素敵な生徒のいる中学校の校長になれて幸せだと噛みしめた 7 分間。演奏が終わって、会場を飛び出すと、吹奏楽部の生徒の保護者に声を掛けられる。「最初の音を聞いて、鳥肌が立ちました。」と声をかけられる。その時、私は涙目でちょっと照れ臭かった。急いで生徒たちのもとに向かう。やり切ったという生徒たちは、みんないい顔をしていた。古谷先生が、ようやくほっとしたという顔をしていた。ここまでの献身的なサポートに頭が下がった。

コンクールであれば、賞が決められる。吉川市立南中学校は銅賞だった。しかし、吉川市立南中学校吹奏楽部の努力の成果は、そんな色で表されるものではない。全国大会出場は、一生の宝物。一生の誇りとなること。10 月 10 日（日）午後 5 時 30 分に吹奏楽部が学校に戻った時、20 名を超える保護者や吹奏楽部ＯＢ・ＯＧ、先生方が、暗くなった正門で出迎えてくれた。それが、すべてを物語っていた。全国大会出場で一番頑張ったのは、生徒と顧問の先生たち。しかし、それだけでは全国大会には出られなかった。保護者・地域のサポートがなかったら、出場できなかった。さらに言えば、今回の出場では、南中学校 PTA や吉川市からも多大なご支援をいただいた。感謝しても感謝しきれないほどの地域の力を得て、関東の代表として誇り高く演奏してきた。教員生活で最高の 7 分間をありがとう。来年も全国大会に連れて行ってくれる生徒がいないかと、校長は夢を見るのでした。